

翻刻
『しかまのかちぞめ
飾磨榻布染』

尾道市立大学 芸術文化学部 日本文学科 一六期生 三好花純

指導教員 藤沢毅

■底本略書誌

『飾磨榻布染』

岳亭莊吾（岳亭丘山）作・画

底本 藤沢毅所蔵本。

小さめの半紙本（二一、七糎×一四、五糎）

五卷五冊 半丁九行

天保六（一八三五）年刊（版元不明）

*底本のほか、現存を確認できた諸本は、三原市立中央図書館所蔵本、九州大学附属図書館所蔵本、横山邦治氏所蔵本（国文学研究資料館 新日本古典籍総合データベースにより画像公開）、神戸大学附属図書館所蔵本（国文学研究資料館 新日本古典籍総合データベースにより画像公開。存四卷四冊、欠卷三）。底本に破れや汚れがあり、判読ができない場合は、これらの諸本によって確認した。

■梗概（三好花純作成のものに藤沢が修正を加えた）

（巻一）赤松家次男である雅楽助の家臣、岩本三太夫には姉の小夜と弟の三平という子がいた。三太夫の配下である龜谷歎蔵は小夜へ恋心を打ち明け、小夜は親の許しがないことを理由に断る。歎蔵は小夜の寝床へ忍び込み、未遂に終わるが、三太夫の逆鱗に触れる。周りからの信用を失った歎蔵は稲上董斎と知り合い、宝剣を贈る代わりに稲上の娘である富児との結婚を要求し、稲上は承諾した。

（巻二）歎蔵は赤松家の宝剣を盗み出し、後を追う三太夫を斬った。歎蔵は宝剣を稲上へ贈ろうとするが、富児は既に他の者との縁談が決まっていた。歎蔵は約束が反故になったことを責めるが、稲上は事情を説明し、結納金の百両を見せた。その夜、歎蔵は稲上の家に宿泊し、夜中に百両を奪い、宝剣を置いて逃げ去った。

（巻三）稲上は歎蔵が残した宝剣を携え故郷の美濃国へ帰った。三太夫は、宝剣を盗んだのは歎蔵で

あろうことを言い残して死ぬ。赤松雅楽助の計らいにより、三太夫の子である小夜と三平、その叔父の三五右衛門の三人は、敵討ちと宝剣探査のために旅に出た。歎蔵は京で丹助という商人に匿われる。小夜らは京で丹助に出会うが、丹助は虚偽の情報を与え、これを信じた三人は二手に別れ、全国を巡る旅に出た。

(巻四) 三平と別れた小夜と三五右衛門は、歎蔵を探し回るが見つけられず、東国に到った。一方、歎蔵は丹助の妻との密通が露見し、丹助を殺して逃走する。三平は妻籠の宿で歎蔵と偶然出会い、逃げられてしまうが、残された金から美濃国の稲上を訪ねる。事情を聞いた稲上は宝剣を返却し、三平は再び東国へ向かった。

(巻五) 小夜と三五右衛門は江戸の酒楼でしばしの慰労をする。宿に帰る時、三五右衛門は忘れ物を取りに戻り、小夜は一人隅田川の渡し船に乗るが、同乗していた歎蔵に気づく。船を降り、歎蔵の跡

をつけた小夜は、歎蔵と切り合い、追いついた三五右衛門の声に力を得、ついに討ち勝った。小夜と三五右衛門は、盗まれた刀を持つ三平に出会い、故郷へ帰った。

■備考(三好花純さんによる作品評価)

三好花純さんは卒業論文の中で、翻刻だけではなく、作品の考察にも力を入れた。中でも、小夜と歎蔵が「恋人同士となるかもしれない」という関係であったことに注目したのは特筆できる。

歎蔵は小夜に恋心を抱き、「鉄染かたぶ(楳布染)の絹」を着物に仕立ててもらおうことを小夜に望み、三太夫の許可を得た後にそれを為してもらおう。絹に恋歌の短冊(今はただ何とかまのかち衣おもひそめてはぬるる袂を)を忍ばせるが、親の許しのない関係には応じられないとの返歌(「たらちねのゆるさぬ色のしら衣を何とかまのかちに染まし」)をもらおう。結局この後、歎蔵

は小夜のもとに夜這いを仕掛けるも発覚し、三太夫から激怒される。歎蔵は小夜をあきらめ、稲上董齋の娘の富児との結婚を望むがこれもうまくいかない。三太夫を殺して出奔し、京の丹助のもとに匿われるが、好色な歎蔵はその妻と密通し、露見に及ぶと丹助をも殺す。さて、やがて小夜に見出され敵討ちがなされることになるのだが、歎蔵を倒した小夜は涙を流し、次のように言う。

「なんじあなたが着たるこのかちぞめ榻布染、こぞの夏にや、われぬひにき。今年こののこよひこの這やうに寸段きりに切さきは、上首はしめありてのをはりぞかし。あなたが悪なごちも今宵をかぎり。せめて未来は成仏なごちいたせ。南無あみだぶつ」

三好さんは、この台詞に歎蔵に対する小夜の気持ちを見る。小夜を恋い、小夜に仕立ててもらった着物を着て歎蔵は死んでいく。小夜もまた自分が仕立てた着物を着ている男を親の敵として討ち、そのことを十分意識している。小夜が歎蔵を恋い慕っていたというのではない。しかし、自分に好意を寄せ

てくれた男として、小夜は歎蔵を憎くは思っていなかった（作品冒頭の歎蔵の求愛に対しても、笑みを見せるなどの行為をしていることから、嫌悪の気持ちをもつての拒否ではなかった）。書名が「飾磨榻布染」となっていることから、歎蔵が小夜に仕立ててもらった着物を着て小夜に討たれるということには注目していかと思われる。歎蔵にとつてみれば、恋した女性に討たれる敵討ちということになり、歎蔵は好色な悪人と設定されていることから、これまでもある形であろう。しかし、その悪人に対しての、小夜はやや複雑な気持ちを描かれたという点がこの読本の特徴であり、魅力ではないか。こうした三好さんの主張は首肯できるものである。

かつて横山邦治氏は『飾磨榻布染』を、「怪奇的色彩が皆無であること」と「仇討話が因果関係をもつて展開していないで、偶然の連鎖で展開していること」を根拠に「単純に過ぎる」と評価していた（『敵討飾磨榻布染』（岳亭莊吾編）について』『近世文芸

稿』二二、一九七七年一月㊟。それに対し三好さんは、特に悪人である歓蔵にとつて「自分の思うような方向に物事が進まない偶然が多い」という点が重要であり、むしろ偶然の連鎖によつて物語が展開していく形を評価すべきであるとした。こちらも天保期の読本を考える上で重要な指摘であると思われる。

■凡例（翻刻の方針）

- ・翻刻は見返し部分からとし、表紙の情報は省略した。
- ・口絵、挿画は図版でも示した。
- ・平仮名は現行の対応する平仮名に統一し、また、漢字も基本的には現行の書体に統一した。
- ・振仮名は底本にあるもので、現在我々が読むのに必要もしくは便利と思われるものだけに付した。
- ・踊り字は「々」を除き、全て開いた。
- ・私に句読点、濁点、「」、『』を補い、また段落を設定した。
- ・明らかな誤記、誤刻も基本的にはそのままにした。ただし、意味が不明瞭になるものについては、その語句の右あるいは下に正しいと思われる文字を（ ）に入れて示した。
- ・以下の文字については次のように置き換えた。

怒 ↓ 裔

【見返し】

五岳（印「八島」）

賀茂季鷹

われもまた いざこととはむ みやこどり
すみだかはらに 夏はなしやと



【見返し】

【序文】

父の讐を討たりし趙嫁（趙娥）が古事を読さして、
 少時座眠、漢書をまくら。忽古郷より消息あり。
 開き見れば、彼里に讐討有し事を記せり。頓て是に
 もとづきて、一小冊子を綴にたり。覚て再般是を看
 ば、かの消息も仇討の事も皆夢にて、綴りし書のみ
 胸に残れり。是を捨んも最本意なくて、其儘爰に書
 つづるも、唯是、可笑の業なりけらし。

在浪華 岳亭五岳 述

【目次／口絵】

もくろく

壱のまき
かち染衣かちぞめころも

師弟のちぎり

二のまき
宝の御太刀たからのみたち

百のこがねもも

播磨の国赤松雅楽助どのの長臣、

岩本三太夫が一女 小夜いわたみさん さいよ

三のまき
旅の首途かして

下主の空言げす そらごと

四のまき
密のそひ寝みそか

邸房のゆあみたびや

赤松家の末臣あきまつけのまへじん 亀谷歛藏かめたにくわんざう



【目次／口絵 ①】

五のまき 女の簀討むすうち

小夜が伯父

岩本三五右衛門いわもと さんご うえもん

小夜が弟おとと

同苗三平どうなえ さんぺい

永井清躬

小夜ごろも きぬうちそめて あつま路の

たびねのゆめも さめにけらしな



【目次／口絵②】

【本文】

飾磨榻布染 卷之巻
しかまのからぞめ
くわんのいちら

岳亭莊吾 編

○かち染の衣

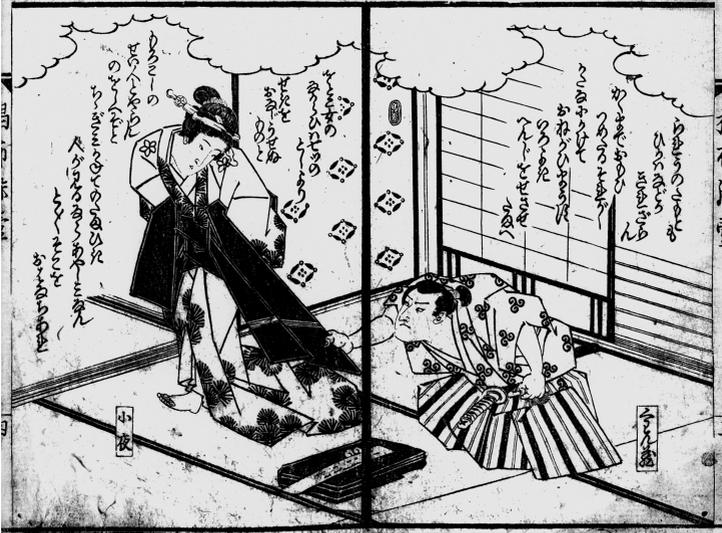
人皇九十五代後醍醐天皇の御代知しめし給ふ頃、播磨の国の住人赤松二郎入道田心、弓箭とりては双なき英傑の聞えあり。嫡男律師則祐、次男赤松雅樂助貞範と号けり。このうたすけの父兄に勝りて量高く、智、仁、勇の三徳備り、生平に深窓に兵書を読、和漢の書に博くわたり、仁に富、義に強く、専ら臣下を愛（挿画1-1）し民を撫、父に代りて政事を執行、れける程に、領内都て穏和に、四民これに伏し喜び、皆万歳をぞ唱ける。

「上仁あれば下義を重じ、君正しければ臣賢なり」と、宜なるかな。雅樂の助どのの藩中に岩本三太夫、同く三五右衛門といふ者あり。弟三五多もんは入道どのの御側に仕へ、兄の三太夫は雅樂の助どのに仕へ

けり。兩個ともに忠を尽し、義を守るの良臣なれば、上にも殊に愛させ給ひ、何にまれ要用の事は這三太夫に命じさせ給ひ、追々禄をまかづけさせ給ひけるほどに、遠からず無二の長臣とも成べきの勢ひなり。

まことや、「叢蘭茂らんと欲れども秋風是を破り、賢哲正しからんと欲れば佞人是を害ふ」といへり。同じ藩中に龜谷歛蔵といへる者あり。下官なれども些少は武術あり、巧言令色にしてよく人に執入の弁才あり。平生に三太夫が家に來り、何くれと信にかたらひけるにぞ、三太夫も大いに是を愛し、おん調度の掃除、元三規式のかざり附、あるは宝庫の虫干など、重き役がかりの事を手助け、上へもよろしく執成けるにぞ、遠からず渠が禄をも増給ふべきの聞えありけるにぞ、三太夫、私に歛蔵にも斯と語りければ、歛蔵も大いに懽喜、いよいよ忠勤をはげみけり。

這三太夫、妻は嚮の年みまかり、跡に二人の子有り。姉を小夜とよびて本星十九になり、弟を三平といひ



(挿画 1 - 1)

くわん蔵

「られうのたもとも、ひかばなどかきれざらん。かく
 までおもひつめたるそれがし、かたなにかけておね
 がひまうす。いろよきへんじをせさせたまへ」

小夜

「をとこ女のなからひは、七ツのとしよりせきをおな
 じうせぬものと、もろこしのせい人とやらんのをし
 へぞと、ちちぎみかねてのたまひき。人が見るなら
 あやしみなん。とくとく、そこをおはなちあれ」

て十七歳なり。姉の小夜は容貌ことに麗しく、いさ
さか男子を幻惑の艶色あり。同じ藩裡の若とのばら、
恋わたる者多かりけれども、堅行生質なれば、慢り
に事をゆるさざりけり。

実や尊きも俚きも躬をやぶるは色欲の二つなり。

亀谷歛蔵、風と此小夜が容色におもひなづみ、只管
こがれくらしけれども、一向に言よる好縁もなく、
空く烏兔をおくりける。

一日、歛蔵、一辺に人なきをりを打探て、私に小
夜にいふやう、

「小僮、此ほど鉄染の絹一たんもとめ侍ふ。万望は
你、これを縫て給らんや」

と云ければ、小夜こたへて、

「下妾がつたなき縫業にてくるしからじと思すなら、
何日なりともおこしたまへ。去ながら、父公のおゆ
るしなくては縫がたし。万望は你よりわが父公へ言
させ給へ」

と云けるにぞ、歛蔵懼び、次の日、三太夫に向ひ、

「小僮、かち染の絹をもとめ侍ふ。万望小夜の御に
ぬひ装立たのみまゐらせたく侍ふ。這事いかがなる
べくや」

と問ければ、三太夫答て、

「粗俗なる女兒が手業、それさへ厭給はぬならば
幾固なりとも縫せ給へ。我も亦、分付て置べし」
と答けるにぞ、歛蔵よろこび、頓てかの鉄染の絹一
たん、小夜に央て縫せける。這時、歛蔵ひとひらの
短冊に、

今はただ何としかまのかち衣

おもひそめてはぬるる袂を

と一首の歌をしたためて、彼かち染の間に挟てお
くりけり。

小夜は夜の間に是を縫をはり、次の日、歛蔵に返
しける。かの歌の短冊はその儘袂にいりて有けるに
ぞ、歛蔵は衣服ぬひ給ひしよろこびの礼幾回かのべ
をはり、然して亦いふ、

「私にまゐらせし歌の返し、是また願しく侍ふ」

と云ければ、小夜はにこと笑ひしのみにて直と立て
行んとす。歎蔵、急(挿画1-2)ぎ袂をひかへ、

「せちに返しを給りね」

と云ければ、小夜とり敢ず、

「たらちねのゆるさぬ色のしら衣を何としかまのか
ちに染まし」

といひて、袖ふり放ちて入にけり。歎蔵、この歌を
聞ておもふやう、

『是、恋の協はぬ歌なり。然ども、這うたの意中、
大いにやさしき処を含り。かくやさしき意を知う

へは、とく小夜が臥房に忍び入、心の丈を告るなら、
此恋、管ず協ふべし』

と独うなづき、亦二三日を送りけるが、一夜、三
太夫が宿直をうかがひ、歎蔵、ひそかに三太夫が家
に遣り、物おく納室の裡に隠れ、夜のふくるをぞ
待居たる。

怎麼してか悟けん、小夜は這夜、弟の三平と臥房
をかへて安歌けり。斯とはしらで歎蔵は、三更とお

ぼしき頃、小夜が臥房にしのび入、懷裡に手をさし
入けるを、三平驚き起いでて、

「何的ぞ」

と云さまに、身辺ありし鉄扇にて頭を大太に打たり
ける。歎蔵、かうべをたく打れ、大いに驚き、はふ
はふ前栽へのがれいで、危く我家へにげ帰りぬ。

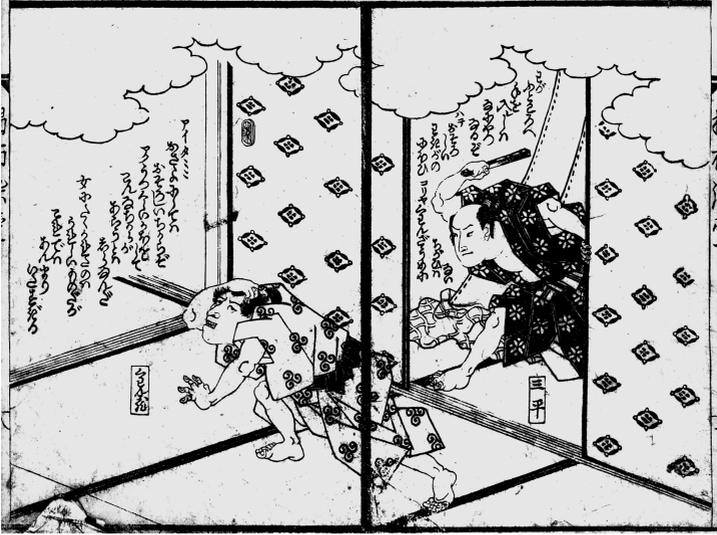
次の日、三太夫、此事を聞て大いに怒り、

「かの歎蔵、いかなれば然様なる不義をはたらくや。
我は然ともこころ着で、却てかれを昇進んと予ては
上へも執成たりき。太朽惜きわざとや云ん。よしよし、
這后、渠をば一向に用ふべからず」

と、是よりして三太夫、那幹をも皆外人に命じ、歎
蔵にはさらに言もかけざりけり。

○師弟のちぎり

「舟に乗ば常に覆溺を以て是に処。仕官せば常に其
不遇を以て是に処。かならず過失なからん」と、古
人の教も有けるを、龜谷くわん蔵、なまなかに三太



(挿画 1 - 2)

三平

「わがふところへ手を入れしはなにやつなるぞ。ハテ、おそろしいわきがのにほひ。コリヤ、くわんざうめにちがひはない」

くわん蔵

「アイタタタタ。おさよにしてはおそろしいちからぞ。アノウつくしいかほをして、こんなちからがあらうとはしらなんだ。女にたたかれたのはうれしいものだが、これではあんまりいたすぎる」

夫が鬚眉にのりて不計小夜におもひ入、三平に打れしこと、城裡一円のとりさたにて、歎蔵、今は他に面を会しがたく、多日病と披露して、「城外の葉湯におもむくなり」と、且飯を吃してより日毎市中に出てあそび、夕陽にいたりて家にかへりぬ。

當下、城辺に一個、武士の浪人來り、軍学の師となふる者、家を借て住けるあり。名を稻上董齋とよぶ。歎蔵、稻上が方へ通伝をもとめて、軍学のまなびと号、日毎きたりて遊くらしける。稻上にも一個の女兒あり。名を富兒とよびて紀十七なり。其容貌、衆にすぐれ、嬋娟として玉珠を欺き桃李をおそふ。彼もろこしの入松、飛燕、わが日の本の衣通、小町、それにも怎麼おとらめやはとおもふ許の光景にて、なかなか岩本の小夜なんどの及ぶべきには有ざりけり。歎蔵、つくづく思やう、
『我、遠からず城中を迫出さるべし。万望謀計をもつて稻上が婿となり、富兒と配合になるならば、個々へのよき面ばらしなるべし』

と万段と心を配り、時をうかがひ居たりけり。這ごろ稻上、「よき刀剣を一ふり求むべし」と、許多の刀買をよびて千種と探けれど、一向にころに協ふほどの刀とては一口も有ざりけり。

歎蔵、是を見て、忽ち一箇の奸計をおもひ着、一時稻上に向ひて云やう、

「それがし、先祖より伝はりし銘刀一ふりを持ち。光次の刀と号す。よく吹毛を切、盤石をたつ。百余年砥上にのせざといへども、一点の錆を生ぜず。鞘は怕明金漫ぬり。こがねの胴輪、七ところ。目貫も無垢の金にて、(挿画1-3)扇の地紙に五七の桐のべの金の木瓜鏝は羽なくしてよく飛応竜のほり上、ふち頭もおなじくこがね、足なくて能あゆむ雲がたを毫彫にしたり。実にこれ、価千金の宝剑なり。今、此銘刀を師にまゐらすべく思なり。然かほりに、我また一箇のねがひあり。師よく是を免し給はんや」と云ければ、稻上、これを聞て小膝をすすめ、「今日ふごこの銘刀あらば、万望はわれに贈給へ。」



(挿画 1 - 3)

【徹藏】

「むすめごとめうとになるうへは、むこしうとのあひ
 だがら、いかなるだいじのみたちなりとも、さしあ
 げいでなんといたさう」

【稲上】

「ごへんはぶじゆつもこころがけあり、しゆせきなど
 もつたなからず、しきしまのみちなどもおこころが
 けあれば、むこにとりてもふそくはござらぬ」

【富児】

「わたしにもとくしんさせず、ハテ、がてんのゆかぬ
 ことぞ」

你おんみまた、『願ねがひあり』と。仮令たとひい奈何いかなる事ことなりとも、

我われまた一向いっさうにいなむべからず。疾々しつせつそれを語かたじせ給たまへ」

と云いけるにぞ、歛よろこ蔵くら大おほいにくろし權ごんび、こたへて云いやう、

「師しのまへにては太いと最といひ苦くるしき事ことなれども、今は

何なにをかつつみ侍さむらはん。それがし、奈何いかなる事ことにや、

娘むすめ御ご富とみ兒こにこころ惑まひ、夢ゆめうつつにも忘わすれる間まなく

思おもひこがれて日ひをおくりぬ。万望ねがはくはそれがしを富とみの御ご

と配めあはせ合あ給たまひ、尊家おんいへのむことし給たまりなば、かの宝劍たうけんは

ことゆゑなく師父おぢりに贈おづりまるらすべし。這このこと幹こといかに」

と問とひければ、稻上いながみ聞きて答こたへていふ。

「小老それがし、一個いちごんの娘むすめありて男子だんしなし。然しかるべき婿むすめを尋たづぬ

るの時ときからなり。彼かの宝劍たうけんだに贈たまりなば、娘むすめが事ことはと

もかくも你おんみが意いにまかすべし」

と云いけるにぞ、歛よろこ蔵くらは天あまにも昇あもる思おもひにて、ひたすら

權ごんび、

「然さらばそれがし、彼かの銘刀めいとうを遠とほからずもて来きたり侍さむらはん。

娘むすめ御ごの事こと、かならず異い変へんし給たまふな」

と堅かたく契せりて別わかれをつげ、晚くれにおよびて城中じやうちゆうへ帰かへりけ

り。

飾磨しきり楊布染やうふぞめ 卷まきの巻まき 終すまひ

○宝の御太刀

歛蔵、いかなれば斯る宝剣を稻上におくるべき約をなしけるよと思ふに、こは我持つたへし刀剣にあらず。主君赤松どのの御先祖より伝りしところの宝剣にして、海内無双の銘刀なり。嚮に三太夫、歛蔵を愛するあまり、宝剣の虫ほしなど、皆這歛蔵に命じて出し入させける程に、歛蔵よく宝庫のうちの開路はしりつ、鍵は三太夫が（挿画2-1）家の仏間にかくしおきつる事まで仔細と心得たれば、『夜にまぎれて遺いり、鍵をうばひ宝庫をひらき、光次の御太刀を偷み、稻上に是をおくり、富児をともなひ那里へなりとも立ちのきて、迹は三太夫に罪を負せ向の恨をはらすべし』と大悪念をおこし、偕こそ稻上にかかる契約をなしつるにぞ有ける。

是より歛蔵、十日あまり稻上が家にゆかず、我家

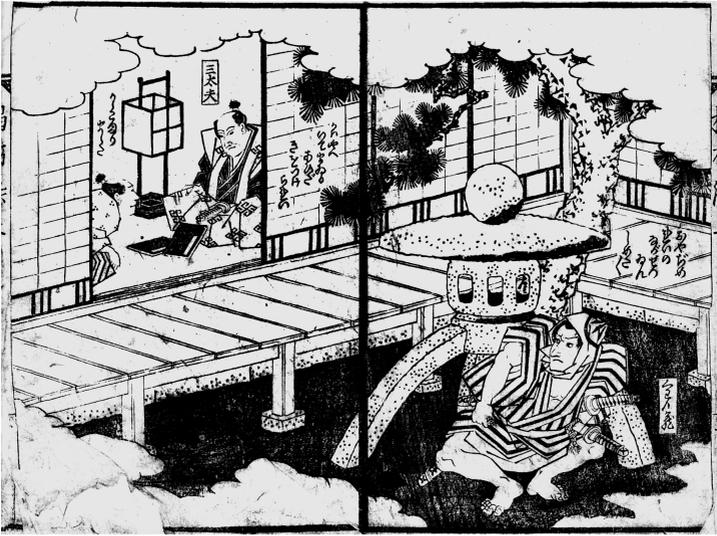
にのみ在て、

『怎生して三太夫が家に遺いり、宝庫のかぎを奪んもの』

と、日毎うかがひ居りける。

時ふし六月廿六日、炎暑いとも堪がたかり。この日、三太夫、宝庫をひらき、光次の御太刀をはじめ千般の珍宝をとり出して、虫干しけり。例年、虫干三日が間なれば、その夜は光次の御太刀も僅に収たるままにて官舎の牀室に正しおき、三太夫、終夜これを守保て居り。廿六日なれば空はくらし。『天の与』と、歛蔵は暗に官舎の扉をのりこえ、間庭の隅にかがまりをり、時ばかりありて三太夫、便たさんとして溷廁にゆきぬ。迹には一人の下官、三太夫に代りて守る。歛蔵、暗に間庭より玄関に忍びゆき、鳴子の縄を掛ければ、からからと音ひびく。下官は鳴子の音に、『謁吏あり』とこころ得て、玄関のかたへ出てゆく。

『寔にこれ、寸の間の透とやいはん。計成たり』



(挿画 2 - 1)

三太夫

「かはやへいてまゐるあひだ、きをつけられい」

(下官)

「かしこまりました」

くわん蔵

「おやちめ、れいのながせつゐん。しめたしめた」

と、歎蔵は飛がごとくに跑来り、牀室の御太刀の篋の蓋をひらき、光次の宝剣をとり出し、『看着られじ』と、其処この灯火を打けしたり。三太夫は青椿の窓より官舎の灯の消しを見て大いに怪しみ、急ぎ陶廁を飛でいで、正堂のかたへ走りける。歎蔵は疾足に間庭のかたへ去んとして、不計三太夫が袖にすれ合て通りけり。三太夫、是をしりて、『偕こそ曲者ごさんなれ』と、忍び足に後をしたふ。歎蔵も亦これをさとり、忽ち刀ひき抜て、三太夫が足首をうかがひより、力を極めて切着たり。隣むべし、三太夫、大袈裟に伐さげられ、仰さまに撞と倒る。這間に歎蔵は再般塀を飛こえけるが、宝の御太刀を扯さげて那里ともなく逃去けり。

向に玄関に去し下官、手灯たづさへ帰り来り、三太夫を見て大（挿画2-2）いに驚き、「官舎の裡に變事あり。出会、々々」

と呼りけり。此声に、「何事ぞ」と、藩裡の人々、三平はじめ個々官舎に駆集り、這体を見ておどろき

狼狽、上を下へと混乱して騒動ひとかたならざりけり。

斯て個々、官舎のうちを查看するに、光次の御太刀、さらに看ず。

「偕は偷賊のわざなりけり。とく穿議せよ」

と云より早く、四方の城門かたく関し、隅々くまぐま空室までのこる方なく探しけれども、一向にあやしきものなし。門守をよびて正誠みるに、

「夜に入ては一個も出いりしたる者侍はず」

と答けり。実は歎蔵、嚮に門士をあざむき出て逃去たるなれども、

『夜中、人を出したる事を云ば、其躬のとがめ奈何ならん』

と怕れて斯は云けるなり。這ゆゑに、歎蔵、しばらく命を保つ事とはなりぬ。

○百のこがね

「事を計るは人に有、是を成しむるは天に有」と。



(挿画 2 - 2)

三太夫

くわん蔵

「たかのあとおふおひぼれすずめ。ナント、ちうのねも出まいが」

唯、何事も思ふごとく成ざるは、天より為せ給ふに
なん。

亀谷歛蔵、当宵二更の頃、稻上が家にいたり、錦
の袋に包みたる光次の宝剣を稻上が前にさしおきて
云やう、

「去る日、約しまゐらせし如く、這宝剣を献りぬ。
万望は娘御と、とく親事をせさせ給へ」

と云ければ、稻上聞て大いに嘆息して答ていふ。

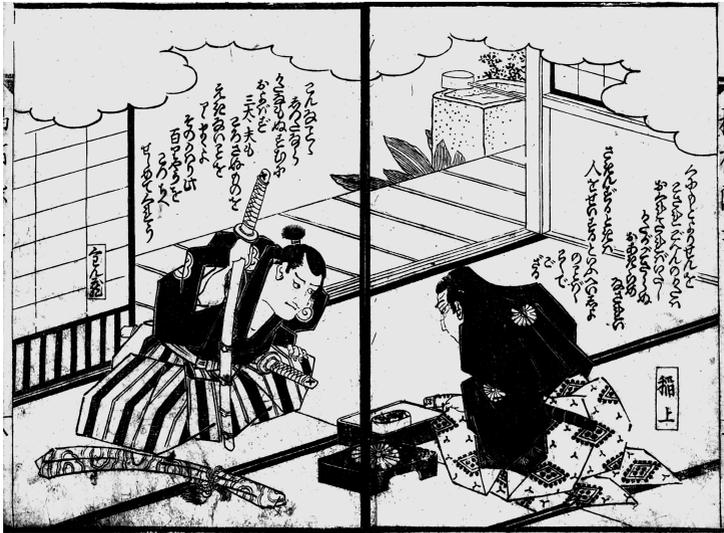
「去る日、你と契約はなしたれども、原来結式も贈
らず、你も更に来り給はず。然るに、わが本国、美
濃国の何がしの許より黄金百両われにおくり、富兒
を娶んといふ者あり。既に這ほど使夫をして先百
金をおくりこしたり。我また古郷忘しがたく、竟
に這縁をとり極め、百金を受とりて、妻と女兒は
使夫と俱に今朝のほど旅立せり。小老は跡にのこり、
是彼の片着して翌は飾方を船出して、我も古郷へか
へるなり。你にもとく知せ、断りせんと思ひしかど、
日毎に来り給ひし躬が、契約してより其後はけふま

で不通と来ずなりし。『偕は這幹いつはりぞ』と思ひ
極めて本国へ女兒を送りつかはしたり。這銘刀はい
と惜けれども、今は怎麼とも詮方なし。とくもて帰
らせ給ふべし」

と云けるにぞ、歛蔵、これを聞て忙然ともの云ざる
事半時ばかり、(挿画 2-3) 漸々にして大いに色を
変じて謂て曰く、

「凡武士たらんものは両言なきをもつて風俗とす。
軍学をもて人の師と仰がれ給ふ躬を持ちながら、怎麼
なれば両の舌を動し給ふや。今となりて小土、約
を変ずる事をせず。這銘刀は進らすべし。富兒は強
て小僮がまうし受侍はん」

といきまき荒く云ければ、稻上、また答ていへらく、
「凡、『麻を載るには畝を作り、妻を娶るには媒
を以てす』と、古人のをしへ。然るに你、氷人をも
求ずして、我に説て富兒と配合せんとほりす。我ま
た、計ざこころ違へ、即答に極めしはこよなき小老
が過失なり。『三思一言、九思一行』ともろこしの書



(挿画 2 - 3)

箱上

「くにもとよりせんをこされ、ごへんのかたはおくれ
たれば、いたしかたがござらぬ。おあきらめなされ
い。『さきんずるときは人をせいする』といふへい
しよのことばは、ここでごさる」

くわん蔵

「こんなこととしたなら、かたなもぬすむにおよば
ず、三太夫もころさぬものを。えきないことを。ア
アままよ、そのかはり此百りやうをこつちへせしめ
てくれう」

にも云り。日毎わが家に來りし你、契約してより其後はふつと顔だに看せ給はず。是、わが疑ひの上首なり。已に兵書にも『心疑ふときは必ず背く』とあるも這謂なり。爰に經紀人だにあるならば、此過失は有べからず。你的虚実しれざる故に富兒はかしこへ送りにたり。今はいかに悔ればとて帰るべき道ならず。万望は怒を止め、這名刀はもて帰り、永く家につたへ給はば、却て先祖へ孝行ならめ。我も女兒も你をきらひて変ぜしならず。実に止事を得ざりしなり。其証を看給へ」

とて、身辺にありし手匣より黄金百兩つつみの儘、把いだして看けるにぞ、歛蔵も今は言なく黙然として居たりしが、つらつらおもひ廻らすやう、

『我、はじめ、三太夫を殺すべしとは思はざりき。却て渠に迹を慕れ、止事を得ず討取たり。然ば、たとひ稲上変ぜずして富兒をわれに配合せたりとも、這家に翌までも居事かなはず。今は這縁ととのはずりしも、却て是、僥倖なり。然れども、今這宝剑

をたづさへて路を走らば、立地人に怪まれ、竟には追人に捉らるべし。如じ、当夜は這家に止宿て、今、稲上が看せたりし百兩を奪ひとり、御太刀は這に残しおき、那里へなりとも趣んには』

と心裡に思ひ定め、稲上に向ひて云やう、

「今、師の曰ひし事、実に理にして返すに詞なし。然ばそれがしは家に帰り侍ふべし。去ながら、今宵はいたく夜も更たれば、城門に入事あたはず。(挿画 2-4) 天曉まで安歇て給るべし」

と云ければ、稲上聞て、「仔細あらじ」と答けるほどに、歛蔵よろこび、竟に当夜はあやしの蚊帳の裡に入、稲上と諸ともに枕をならべて臥にけり。

已にして丑満(丑三)の遠寺の鐘のこゑすみて、灯火のかげ薄ぐらく、亦明うなり又暗し。歛蔵、暗に起いでて、稲上が枕辺なる、黄金入たる手篋を盗み、御太刀は其まま捨おきて、那里ともなく逃去けり。

飾磨褐布染 卷の二 終



(挿画 2 - 4)

くわん蔵

「此百りやうをこつちへせしめるかはりには、たから
のみたちをかやのうちへおいてゆくぞ。百りやうで
そのかたなをうつてはやすいものだ。もとねがき
るけれど、しまひあきなひ、まけてやるぞ」
「あのししのやうないびきだ。おつつけおきて、てつ
ばう玉のやうなめをむきおるであらう」

籾上

○旅の首途

斯て稻上は天暁にいたり起出けるが、歛蔵は更に
看ず、不審に思ひ一辺を看ば、宵にまくら辺に置し
金の入たる手匣なし。

『偕は歛蔵、わが縁ぐみを変改せしを恨におもひ、
かの百金を偷とりて逃去しとおぼえたり。為何は
せん』

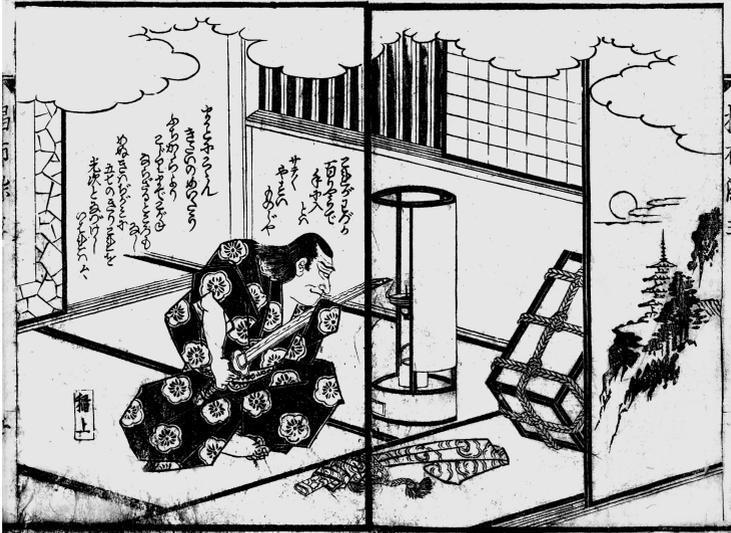
と思ながら、亦、彼方をかへり顧ば、光次の太刀
を捨おきたり。再般おどろき、とり揚みるに、寔に
これ奇代の(挿画3-1)銘劍、かしらより鑑まで
黄金もてうづめたれば、然ながらに怕明ばかり。抜
放ちて打かへし看ば、明晃々として光り八方をて
らし、夏なほ寒き心地ぞせらる。稻上、心裡に思ふ
やう、

『這太刀、なかなか千金をつむともよく求むべき

処にあらす。渠、かの百金に眼くらみ、這太刀を
忘れ逃去しは、正に是、天より戒め給ふところなり。
寔や、鹿をおふものは目に泰山を看ずと。或は錦
ありて人を見ずのたぐひ。偷する者の眼は何れも
同じ事なりけり。能々われ、今、這宝劍を百金に
て買得しなり。太おもしろし。最おかし』
と、ひとり點頭よろこびける。

斯て朝飯をきつし終り、御太刀は担兎の裡におし
いれ、人を雇ひて是を荷せ、飾磨の浦より船にのり
浪速の方へいそぎけり。

爰にまた城裡には、三太夫に手疵を負せ、御太刀
をぬすみ逃去し者、誰ともしれず、城裡の個々、四
方にはしり、残る方なく尋れども、更に手がかり
も有ざりけり。三太夫は一処なれども大疵にて、宵
より一向に言語事あたはず。名医四、五個さまざま
助帳、疵ぐちを洗ひ、糸もて是をぬひ、万種の奇薬
を施しけるにぞ、漸々暁のころに到り、僅に虫
の鳴ばかりなる声をいだし、



(挿画 3 - 1)

稲上

「これがわづか百りやうで手に入とは、サテサテやす
 いものじや。まことにここんきたいのめいたう。ふ
 ちがしらよりこじりまで、こがねならざるところも
 なし。めぬきはちがみに五七のきり。これを光次と
 なづけしいはれは、ムム」

「昨宵、御太刀を偷さふらふ者は、亀谷歛蔵に疑ひなし。渠、わが女兒に恋慕し、三平にかしらを打れさふらふを意恨におもひ、御太刀を奪ひ小老に罪を負せんと計しなりき。然を小老、渠とさとり、『手捉にせん』と慕しところ、却て渠に伐れしは、老恍たるにて詮方なし。はやく歛蔵を宣捉たまはるべし」と云果て、竟に空く成にけり。

三平、これを聞よりも、刀おつとり飛が如く歛蔵が家に行て窺に、はや逐電して去方しらず。門の戸も明はなちたる儘にて、衣服調度もとりちらし、いかにも狼狽て逃去し光景なり。三平は詮方なく、空しく家に帰りけるが、入道円心、這事を聞て大いに怒り、

「渠三太夫、高禄を貪りながらわが重代の太刀を偷れ、名もなき下郎に伐れ、偷賊をば捉逃せし事、そもそも怎麼なる行跡ぞや。今より渠等が従類をことごとく死刑に行ふべし」

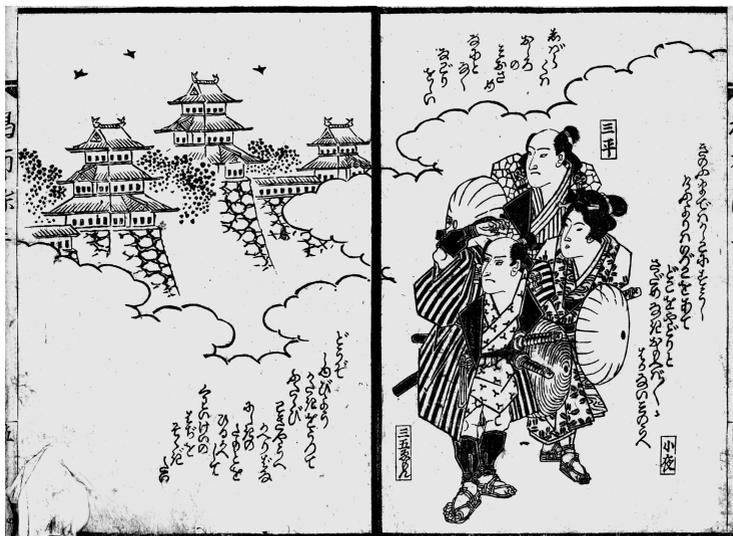
と敦圀あらく怒れける。(挿画3-2) 雅樂の助どの、

是を聞れ、いそぎ入道どのの御前にいでて言れけるは、

「当般、三太夫、光次の御太刀を失ひ、その躬、太疵に死したるは、こよなき渠が過失なれども、這つみ、子孫におよぼし給ふはいささか仁に遠きには侍はずやと、小郎は思ひ侍ふ。賞は重きに従ふべし、刑は輕きにつくべしと、古人の詞もさふらへば、一旦這つみを免させ給ひ、一子三平ならびに伯父の三五多もん們をして歛蔵が去方をたづね、讐を討て宝劍をとり返し、再般帰参いたすならば、当家の本懐、かれらが躬の僥倖なるべし。万望は嚴君、此一事は小郎に任せ給るべし」

と、言を尽して述べられる。入道どのも『実理』と思れければ、神速に是を免させ給ひける。雅樂の助どの、おん前をしりぞぎ、頓て三太夫が弟、岩本三五多もん、ならびに小夜、三平輩三個をめし給ひて曰ふやう、

「三太夫が当般のおちど、実に言語にのべがたし。



(挿画3-2)

小夜

「きのふまではかしこにすみし。けふよりはいづこをあて、どこをやどりどさだめなき。おもへばおもへばはかないみのうへ」

三平

「しばらくはおしろのみおさめ。なにとなくなごりをしぐ」

三五多もん

「どうぞしゆびようかたきをうつて、ふたたびこきやうへかへりばな。にしきのたもとをひるがへして、くわいけいのはちをそそぎたい」

「賢明に近く則是道義たかく、愚暗を友とする則是殃禍集る」と、仏經にもをしへたり。歛蔵ごとき愚悪のものを用ひし故に、かかる過失もおこるになん。你輩、今より父兄の葬式だにいとなみ終らば、一旦訣絶をつかはすなり。然ば你等、いづくへなりとも立越て、歛蔵を找尋、かたきを討、宝剑をとり返し、めでたく歸りて、再般家に仕へよ」と有けるにぞ、三個は是を聞て大いに懼び、「尊命にしたがひ、遠からず仇をふくし宝剑を把かへし、頓てぞ帰国つかまつらん」と貴答をぞまうしける。夫より雅楽の助どの玉杯を給り、「長き旅路の盤纏に」とて、若干の黄金をたまはり、鉄染の衣三疋を下されける。三個は涙をながし、平臥て是をいただき、「今にはじめぬ御仁心、死とも忘れは侍はじ」と幾回か拝しまゐらせ、やがて御前をまかんでけり。斯て三大夫が亡骸をとり収め、形ばかりの葬送をいとなみ、僧を請じて三七日の法要をつとめ、夫よ

り準備をととのへて、文月の廿日ばかり、住馴し家を立出て、何処を的とも泣なみだ、押ながらに三個は城下をはなれ遙々と浪華のかたへおもむきけり。

(挿画 3-1-3)

○僕のそら言

「甘露および毒薬は皆人舌の中に有」と、彼經にもみえたりけり。

爰に皇都今出川のほとりに裏家住して、朝夕のけぶりも立かねて太も貧き生活する丹助といふ者あり。原は赤松家の足軽なりしが、去る年、仕を辞て生、国京師に立かへり、一個の妻をむかへ賈人となりて暮しけれども、唯貧きにはくるしみけり。

偕も龜谷歛蔵はこの丹助が家に尋訪いたり、能やうに云こしらへ、「少日の徳漣をたのむなり」とて黄金三ひらばかりとらせけるにぞ、丹助、大いに権喜、夫より歛蔵を我家にとどめおき叮嚀に助帳けり。歛蔵は爰に在て扇を折ことを業となし、要の事は夜の



(挿画 3 - 3)

くわん蔵

「ふしぎなえんで此やうに、いかいおせはになります
る。どうぞいつまでも見すてぬやうに」

丹助が妻

「わたしがやうな山だしの、山ぢやのだしたせんじが
ら、くるしからずはおあがりなされ」

丹助

「けふはささ木さまからえびすやさまへまはつて…」

みありき、昼は些しも外面に出ず、丹助には時々ものをとらせけるにぞ、丹助夫婦はいよいよ懽喜、歛蔵を主君の如く思なしてひたすら大節（大切）に冊きけり。

偕も岩本三平、小夜、三五多もんの三個は、浪華に一月あまり逗留し、四方をさぐり找尋しが、

『ここは播磨に近かりければ、よも這辺にはをるべからず。然ばみやこに登るべし』

と、夫より花洛におもむきて、廿日余りも尋ねけるうち、一日不計この丹助に往遭けり。丹助、頭を土にすりつけ町寧に礼を行ひ、

「偕も御そろひにて何地へおんわたり侍ふや」と問ければ、三平答て云やう、

「亀谷歛蔵に父を討れ、その仇を報ん為に、斯諸方たづぬるなり。你、こころ当あらば教よかし」

丹助、是を聞いて心裡におもふやう、

『偕は歛蔵、人を殺して、住べき家のなき儘に、我を欺きて隠すむとおぼえたり。こは奈何して善り

なん』

と初て是に驚きしが、亦つくづくと思やう、

『我、今、歛蔵におほく黄金をもらひ、漸々貧しきを忘れたり。万望は渠をたすけ、いつ迄も我家に置ばや』

と思ひ、空言て答て云やう、

「彼歛蔵、兄は出家して筑紫に住し、また出雲にも一宗あり。姉は夫の縁にひかれ、嚮のとし越後のかたへ下り侍ふ。何れ歛蔵、そのわたりへ央依にはうたがひなし。播磨ちかき這わたりを尋ね（挿画3—4）させ給へるは仇し事なるべくや」

と云ければ、三五多もんも三平も是を聞いて、
「これ大いに理なり。然ば是より二方に別れて尋着べし」

と、三平は北国路、小夜と三五多もんは九州路と、左右に別れて急ぎけり。『計果たり』と、丹助は急ぎわが家に立かへり、歛蔵に斯と語りければ、歛蔵、聞て大いに懽喜かつ赤面し、今は何事もつつまず三太



(挿画 3 - 4)

丹助

「人をあやめしかめだにくわんぎう、はりまにちかき
こころにはよもかくれてはをりますまい。いづれと
ほく、ゑちごあたりへにげさりしにはちがひござり
ませぬ」

三五 五もん

「その方がいふところ、おほいにだうりじや。そのほ
つこくのあねとやらん、くはしくなあてはしれまい
か」

三平

「しもべにしてはかしこいやつじや」

小夜

「なさけない。そのやうなとほいところまでたづねて
ゆかねばならぬことかいな」

夫を殺せし事を打あかして仔細かたり、亦、黄白を
与へて央ければ、丹助はますます伸眉、なほ大節（天
切）にかくまひけり。

嗚呼、這丹助、いかなる者ぞ。わづかの黄花にま
なこくらみ、忠臣孝子を哄哄て遠く西北へおひやり
しは、無慙といふもおろかなり。

飾磨榻布染 卷の三 終

飾磨榻布染 卷の四

岳亭莊吾 編

○密のそら寝

世中は何かさして我ならん
行止るをぞ宿と定る

岩本の小夜と三五多もんは、三平に扯わかれ、丹
波、但馬を打こえて、とほく因幡の白うさぎ、導引
してまし八銚の、神のみや居に詣ては、武運をいの
る出雲路の、いづも八重垣つまづきて、足ないため
そ真金ふく、吉備の中山打こえて、出れば道もひろ
しまや、安芸の宮島みやばしら、太く立てふと（挿
画4-1）まにの、被をよめる祭祠の、にぎはしき
土地には五日十日も止留て、急がぬ旅にいそげるは、
敵に阿武の松ばらや、長門を過て下の関、わたれば
豊の国さかひ、豊のあかりも宵の間や、都のそらと
詠給ひし筑紫の神も拝しつ、肥後の阿蘇山あすを
さへ、知ぬ旅路になやみては、豊後の佐賀のさなが
らに、船にて登るかみつ代の、二名の島とよびにけん、



(挿画 4 - 1)

小夜

「よいけしきじや。ここはなんといふ川じやいな」

三五多もん

「ここはどうかいだうのあべ川といふ川じや。これを
わたるとめいぶつのうまいもちやがある」

伊予路へこえて空海の、靈地のこらず打めぐり、『万葉集』に眉のごと、雲井にみゆるとつらねけん、阿波しまこえて御餉むかふ、淡路をよそに逢々と、紀の路をこえて音にきく、高師の浜の仇なみや、浪花にまたも着にけり。

爰にて指をりかぞふれば、古郷出てけふまでは早一年に近かりけり。『斯ては奈何なりぬらん』と、小夜は涙にふし沈む、心をくみて鶏がなく、吾妻のかたを找尋んと、奈良にやどり三輪をゆき、西行法師が何事の、おはしますかはしら幣、神路の山や内外の、尊き宮に詣つつ、行ば吹くる神風の、追分すぎて海道を、東のかたへ下り舟、桑名の渡海打わたり、宮もわら屋に松風の里をすぎ山を越、或は秋葉鳳来寺、仏の法のさつた山、天津乙女の三保のうら、彼赤人が天地の、ひらけぬ先にと詠じけん、高く尊き駿河なる、富士の高嶺をながめつつ、三島の郷の神まうで、箱根あしがら足曳の、山また山をくだりては、彼小田原にともす火の、夜行なせそと宿かりて、

翌はたづねん心ある、鴨立沢も程ちかき、道はすね木の梅沢や、花貝ひろふ江島の、巖室にめづる夕月の、鎌倉山も残りなく、尋ね廻りに程谷の、ほどもあらしに荒波の、打よる岸の松なみ木、浪を焼なる漁火と、かの何がしが詩に、作る駅路の鈴が森、すぐにあゆめば竹芝の、浦廻につづく武さし野の、草より出て艸に入、月のみやこに着にけり。

爰に亦、歛蔵は丹助が家に舎匿て住事、竟に一星におよびけるが、元来好色の生質なれば、いつしか丹助が妻と密に通じ、丹助が眼をしのびて昧旦たのしみ暮しける。彼楊震が教にし四知も衆知とひろごりて、竟には丹助が耳にいり、胸をもやして過げる処に、ある夜、丹助、要ありて遠く行、夜更て家に帰りけるが、暑き夜（挿画4-2）なれば門の戸もひらきたる儘にて有。丹助、何心なく裡に入、只看ば蚊帳の裡に歛蔵とわが妻とひとつ褥に臥居り。丹助、是を看よりも怒心頭にもえのぼり、忽ち蚊帳の釣糸を切おとし、柎を把て兩個の者を思の儘



(挿画4-2)

丹助が妻

「たんすけどの、けがさしやんな。たれぞ、はやうき
てくれんかいなア」

くわん蔵

「おれがせぼねをそのあふこでいせおつた。そのか
はり、あふこをかづくかたさきから、うぬがあきな
ふ、うり、なす、かぼちや、ふたつわりにしてくれう」

丹助

に打居ければ、妻はひたすら泣咤ぶ。歛蔵、やうやく蚊帳をぬけ出、刀扯ぬき丹助を一かたなに伐殺しぬ。妻もやうやう這出て一宗のかたへ逃去けり。

跡には歛蔵ただ一個、つくづくと思ふやう、

『今、丹助を殺したれば寸時も這に住居がたし。我、僥倖に黄金はおほく貯蓄もてり。其上に、去年の夏、稻上が家にて奪し百金は手をも添ずて其まあり。今より陸奥のはてにも立こえ、這金をもて人を馴着、言をたくみに計なば、よき仕官もなすべきなり。疾這ところを趨め』

と、立地準備をととのへて、半夜に這家を立去けり。

○旅舎の浴

爰に亦、三平は北国路へ立こえて、爰に十日、かしこに廿日と賑しき処には太永々と逗留し、歛蔵が去方を捜しけれども、一向にまた知こと能はず。金沢より越後へめぐり、竟にはとほき出羽の国、みちのく迄も尋ねけれども、塵ばかりの手蒐もなし。夫

より跡へ扯かへし、常陸、下ふき、武さしのより木曾海道をこころざし、『再般みやこを尋ぬべし』と、只管に急ぎけるが、這時はや一年すぎて、亦、夏の炎暑となりぬ。三平は昼は暑にて途に憩ひ、夜に入て妻籠の駅に宿りけるが、逆旅房の婢女来りて、

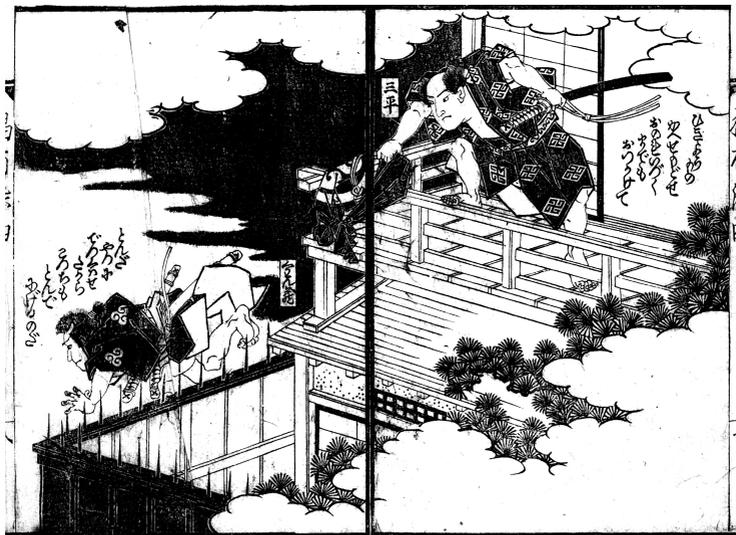
「浴室にめさせ給へ」

といふ。三平心得、女を開路に浴室にいたり、全裸になりて浴桶にいり、躬を洗ひてぞ居りける。

少時ありて、亦一個の旅客、手に浴布をたづさへ、浴室の戸をひらき入来れり。浴室の裡にひとつの灯火あり、互に面を看合すれば、入来し客は歛蔵なり。

歛蔵、三平がここに在を見て大いに驚き、浴室の戸を撥としめ、忽ち楼上へかけ登る。三平、浴室より飛で出、躬をもぬぐはで衣服を扯かけ、帯結ぶ間もこころ慙、刀おつとり跑的ぼる、梯兒も二段をひとまたぎ。歛蔵は、はや担兒を（挿画4—3）

背おひ、楼上の窓より屋頭にいで、千栽の塀を越んとする処を、三平は是を看て、同く窓よりをどりで、



(挿画4-3)

三平

「ひきようもの。かへせ、もどせ。おのれ、いづくまでもおつかけて」

くわん蔵

「とんだやつにでつくはせたから、こつちもとんでにげるのだ」

歎蔵が背おひたる袱襖をとらへたり。歎蔵は躬をのがれんと、背負し袱包をときすて、塀より外へ擡とどび、去方しらず逃去けり。三平もつづいて塀をとび越たれど、這夜、ふみ月六日の宵、釣月も山にかくれ、黒白もわかぬ真のやみ、西か東か去方をしらず。然ども三平、八方に駆めぐり、天曉までも找尋にけれど、竟に歎蔵を看失へり。

三平は天を仰ぎ地をふみならし、齒咀を做ども詮為なし。『倘、手蒐りの事もや』と、歎蔵が捨おきし袱包をときひらけば、裡に一固の手匣あり。また這手匣をひらき見ば、中に黄金百両あり。然して這匣のうらに、朱漆もて「野上の里 稲上氏」とぞしるしたる。三平思ふやう、

『野上とは美濃の国の事ならん。此稲上こそ歎蔵がかくれ家に疑ひなし。然ば今より彼処におもむき、本望を遂べきなり』

と、夫より這邸房を立いでて、美濃路をさして急ぎける。

「葺かへて月こそもらね」と詠にけん、不破のせき屋に太近き野上の里に着ければ、三平は稲上が家とひ極め、案内もなく直と通り、

「這家に龜谷歎蔵あらん。とくとく出よ」

と呼はりければ、主老稲上董斎、悠然として出来り、

三平に向ひていふ、

「我家に然やうの人なし。抑足下は那国の人にて、また何等の因縁ありて這樣には慇給ふや。つつまざ

語給へ」

といふ。三平答て、

「小士は、播磨の国、赤松どのの藩中にて、岩本三平といふ者なり。龜谷歎蔵、わが父を討て、光次の御太刀をぬすみ逃去しより、我また諸國をたづね廻り、這ほど妻籠の旅舎にて出あひたるに、渠、塀をのりこえて逃失たり。捉んとせし時、我手に残りし袱襖、ひらき看ば、ひとつの手匣に百両の黄金あり。匣のうらに『野上の里 稲上氏』とあるをもて、我、今ここに來れるなり。歎蔵をかくまひあらば神速

に出させ給へ」

と云ければ、稻上、はじめて歎蔵が悪事をさとり、其躬、去年のはるより播磨の国、飾磨のさとに住せし事、また歎蔵が光次（挿画4-4）の御太刀をたづさへ来りし事、渠、百金をぬすみ逃さり、御太刀は跡にのこしおきたれば、詮方なくて持かへり、今、家に秘蔵なしつる事まで落もなく談話ければ、三平は聞事毎にたんそくし、且懼び、

「しかあらば這百両は是下の金なり。当下返まゐらすべし。願くは宝剣を小土に給り侍へ」

と云ければ、稻上聞て、『是、大いに理なり』とて、やがて御太刀を把いだし来り、三平に遞与ければ、三平とりて幾回おしいたき、かの百金は手匣と俱に稻上に返しける。

稻上、また三平に云やう、

「彼歎蔵、おそらくは東国にわしりたらんと思ふなり。你、今より再般吾妻におもむき給はば、極て敵に逢給ふべし」

と云けるにぞ、三平答て、

「命の如く小僮もまた然おもへり。さらば訣絶を給らん」

と、竟に稻上に辞し別れ、光次の御太刀はかたく包て背におひ、再般東へ扯かへしぬ。

飾磨楯布染 巻の四



(挿画 4 - 4)

三平

「かくみだりにふみこみしは、たしかなしやうこあつてのこと。サアサア、はやくくわんざうをこころいませ」

稲上

「おせきなさるな、おわかうど。たとひいかなることなりとも、つつみかくすそれがしならず。まつまつ、くはしくしさいをかたりめされ」

岳亭荘吾 編

○女のあだ討

當下、武蔵の国、世田谷城には吉良義保、葛飾には石浜入道、莊士の郷には勢津入道、同く遠海之佐、入間には竹沢堅物、莊原、蓮沼、川越、稻城、丹の党の一族輩、そこ爰に居城をかまへ、城外の市街繫昌して太賑しくぞ看にける。

三五多もんと小夜は、豊島さ多もんどの飛鳥の城下に邸房をもとめ、日毎市街を徘徊して、賑し（挿画5-1）き処にはいつまでも遊びめぐり、『倘、藏にあふ事もや』と心をくばりて找尋ける。

七月の半ごろ、浅草寺の観世音へ参詣し、『万望かたきを導引給へ』と叮嚀にふし拝み、それより隅田川を打わたり、梅若塚のほとりにて、『のこる暑を凌め』と、一辺を乞とかへり看ば、爰に一軒の酒樓あり。三五多もん、小夜に云やう、

「寔に此一とせの焦慮、けふなん爰にて晴すべし」

と、夫より這酒樓にのぼり、主老に命じて些少の酒と魚とを出させ、小夜にも飲せ、その躬も吃て半日の酔をつくし、這ほどの憂を頑要けり。這楼上より眺望ば、広々たる浅茅ばら、蒼々たる閑屋の里、北には筑波、西は富士、浅草寺の宝塔は雲をつらぬきて半空にそびえ、隅田川の流は綿連として遙に遠く、かの漢土の浙江ならずは近江の湖水もおよばじと眼を驚かす許にて、其風景、えも云れず。三五多もん、一首をつらねて曰く、

厓樹水雲一色秋

煙波森渺信二扁舟一

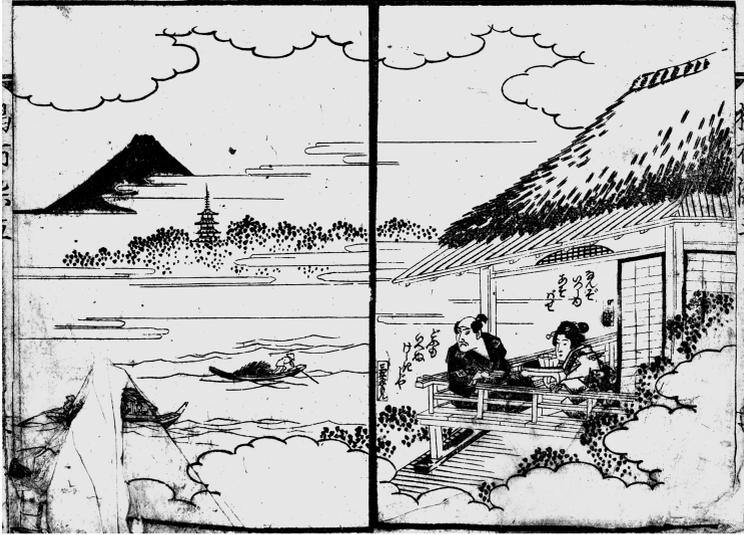
輞川再起写何得

三面風光動二小楼一

と吟詠してたはぶれける。這川には都鳥てふものありと、かの伊勢の御も述にけん、夫さへけふは看ざりければ、小夜、戯れに、

たづねつる人にもあはで隅田川

けふはこととふ鳥だにも見ず



(挿画 5-1)

三五多もん

「どふもいへぬけしきじや」

小夜

「なんぞいつしゆあそばせ」

と詠いでて、互に心を安無(安撫)て酒うち吃て居たりしが、這ほどの勞身にや、立地睡魔にさそはれて兩個ともに睡にけり。

時ばかりありて眼をひらけば、はや日はくれて月出たり。三五多もん、打驚き、

「是より飛鳥の里までは道のほども太遠し。然れ月に乗じて帰んには亦一興にこそ有らめ」

と、頓て主老に酒代とらせ、這家を出てより僅にあゆめば渡場なり。急ぎ舟にのりけれども、「乗会人些少」とて、稍水いまだ舟を出さず、少時舟に待合しぬ。

這時、三五多もん、小夜に云やう、

「我、嚮の酒楼に扇を忘れおき来れり。這間に走り行て把来らん。你はしばし舟の裡に月を眺て待ねかし」と云すてて走り行ぬ。

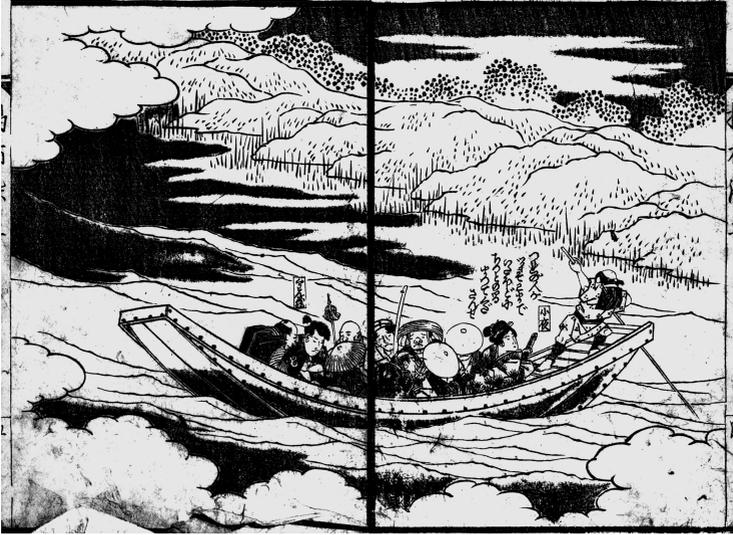
斯る処へ二十個あまり動路々々と舟に乗ければ、擺渡的、棹をとりて漕出さんと做けるを、小夜、袂をひかへて、(挿画5-2)

「下妾が列の人、幹ありて彼処へ行ぬ。今些し待給へ」

と云けれども、棹船的、さらに聞ぬ風にて舟を中流にこぎ出しぬ。乗合の個々は万千の談話に興を催すその間に、何とか聞なれたる人のこ多す。小夜あやしみて透し窺ば、かたき歎蔵によく似たり。這夜七月十五日、月は磨るかがみの如く船裡きよらに看わたる。

小夜は、『わが顔見られじ』と、人の陰にさし俯伏、いく度かこれを打探みるに、正に是、かたき歎蔵に疑ひなし。小夜、心裡飛たつ嬉しき、然ども伯父三五多もんが後れて跡に残りたれば、『奈何はせまし。とやせまし』と一向に心も心ならず、胸うち躍る許なり。右左する間に舟は向辺のきしに着ば、乗合の個々、舟より登り、おのがさまさま散ほひゆく。小夜は歎蔵に目も放さず迹をしたひて行けるが、つくづく思ひめぐらすやう、

『這年月が其あひだ、露塵の間もわが傍をはなれ給はぬ伯父君の、今宵にかぎりて斯やうに後れさせ給ひしは、怎麼なる神の憎ぞや。今、伯父公を待合さば、歎蔵を看過すべし。今、はた渠を道しなば、再あふ事



(挿画5-2)

小夜

「つれの人がツイそこまでいたほどに、ちつとの間ま
つてくださんせ」

くわん蔵

は優曇華の花をちらして何の世に父の恨を晴けなん。然ばとて、われひとり渠に對ふは螳螂の車に向ふに異ならず。とはいへ、思ふ念力は巖すら通すとかや。一太刀なりとも怨て後、死とも悔に及じ』
と思定めてしたひ行、心の底ぞ哀なる。

残る暑の強ければ、市町のあるかぎりは門々も賑しかり。いつしか町家を出離れば、一日は暮て野には臥とも宿かるな 浅草野辺」とよみにけん、最さうさうしき野に出たり。爰は往来もまれまれにて、今は唯、歎蔵と小夜と二人のみとぞ成にける。歎蔵もいく度か後身を顧つつ足疾きは、渠も心にこたふめり。小夜は渠におくれじと、歎蔵が早くあゆめば疾く歩行、おそくあゆめば遅くあゆみ、立止留ればとどまるにぞ、歎蔵たちまちは是を悟り、刀を握りて扯返す。小夜はくわん蔵が扯かへし来るを看て、
『今は是までなり。伯父ぎみも来給はねば、唯神仏をちから草、露の命は天にまかせ、一太刀（挿画5-3）なりとも恨てまし』

と、刀扯ぬき立向ひ、

「いかに歎蔵、よも妾を忘れはせじ。岩本三太夫が娘の小夜。父の讐の恨の刃、一太刀請よ」

と云さまに撥的と切ば、くわん蔵、飛のき、

「偕は岩本の小夜にて有けるか。去年は你に恋こがれ、命も惜とは思はざりき。今星の今宵は恋さめて、你を這野に殺すなり。覚悟せよ」

と伐着る。小夜も同じく身を交し、縫児を窺ては切込ども、歎蔵は武術あり、小夜はさすがに女のわざ、合たびに逡巡、くわん蔵はひたすらに踏こみ踏こみ切まくる。小夜が命は野辺の露、今やきえなん灯光の風にあらそふ風情にて、危うかりける形勢なり。

斯るところへ三五多もん、宙を飛で跑来り。這体を看よりも、

「其処にあるは小夜なるか。三五多もんが来りしぞ」

と囁る声は千人力、小夜は十分ちからを増ば、歎蔵は胸にこたへ、思はず跡へひくところを着入て切こむ刀、歎蔵、眉間を伐やぶられ、眼に血入てたたかひ



(挿画5-3)

小夜

「ちちぎみのかたき、かくこいたせ」

くわん蔵

「むかしのこひ人、いまのあた。をしいものだがかへりうちだ」

三五多もん

「ハテ、こころえぬ、きりあふたちおと。コリヤ、たまらぬ」

得ず。『得たり』と、小夜はつけいりつけいり、竟に
歎蔵を切ふせたり。

三五多もん走りより、

「奈何くわん蔵、你、三太夫を手にかけてし天の網の
がれがたく、今宵命を失へり。かの光次の宝剣はい
かが做しぞ」

と問けれども、くわん蔵、一向にごゑ出ず、「美濃の国
のがみ」といふ事僅に聞え、其余はさらに訳分たず、
唯口のごめくののみ。

「今は詮なし。とどめを刺」

と三五多もんが指揮にて、小夜はふたたび刀を把、歎
蔵が心頭をおさへ、忽ち涙をはらはらと流し、

「你が着たるこの榻布染、こそ夏の夏にや、われぬひ
にき。今年のこよひ這やうに寸段に切さきは、上首
ありてのをはりぞかし。你が悪も今宵をかぎり。せ
めて未来は成仏いたせ。南無あみだぶつ」

と云ながら咽通をつらぬけば、鮮血ながれて草むらの
虫鳴やめば、鐘のこゑ、無常を告げものさびし。

斯て在べきにあらざれば、三五多もん、当夜、土地
の県令へうつたへ、一五二十をこまごまと語ければ、
次の旦、おほやけの官人来り、件一に考察をとげ、是
を糺し、僅三日にして幹済けるにぞ、小夜と三五多
もんは竟に（挿画5—4）這地を立出けるが、

「彼くわん蔵、御太刀の事をとひし時、『みのの国、野上』
といへる事をいひき。然ば是より美濃路にいたり、御
太刀の僉議をなすべきなり」

と、夫より木曾海道へこころざし、只管道を急ぎける
が、沓掛の宿にて弟三平に往あひけり。

三五多もんは小夜が父の讐を討たる事をくはしく語
り、三平は妻籠にて歎蔵をうちもらしたる事より、稲
上にて宝剣をとり返したる事まで落もなく語り合、か
たみに憍ぶ事かぎりなし。

是より三人諸ともに打列立て急ぎけるが、日ならず
して古郷へ、にしきと飾る鉄染の、しかまの衣も清
かに、三個そろへて帰りしは、最も愛たき事なりけり。



(挿画5-4)

小夜

「此とし月のうらみのやいば、こころよくうけとれ。
 いんぐわのくるま、めぐりあふ。『ごぞのこのごろ
 ころしたる三太夫がみぢかきものうらみのやいば
 にしたり』と、しゆらのちまたで岩もとにくはし
 ुकかたつていひわけせよ」

くわん蔵

三五多もん

「ほんまうとげて、めでたい、めでたい」

飾磨榻布染 卷の五 大尾

天保六乙未年嘉月日

五岳楼窓下採筆